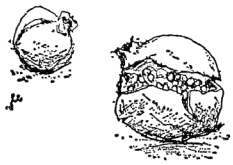

巻頭言

学会としての日本光学会

日本光学会幹事長　朝倉利光*

日本光学会は，その前身である光学懇話会が応用物理学会の分科会として設立されてから本年4月1日で満42年を迎える．光学懇話会が日本光学会と改称したのが1989年であり，学会となってから僅か5年しか経過していない．ややもすると光学懇話会の歴史を基盤に，日本光学会はかなり古い学会で内容的にもしっかりした学会の如く思われることが多いかも知れない．しかし，独立している国内外の学会と比較してみると，日本光学会は学会として非常に未熟であり，やはり5年の歴史の内容しかもっていない．この期間における池田，一岡両幹事長の多大の努力と指導力によって，日本光学会はようやく学会としての入口に到着してきたように思われる．やはり光学懇話会はいわゆる懇話会であり，学会の内容をもつに至らなかったようである．

名実共に学会となるためには，基本的な二大活動を確立させることが必要である．一つは出版活動であり，もう一つは学術講演会を始めとする会議開催活動である．前者については，光学懇話会の時代から「光学ニュース」を発行し，1972年には「光学」へと発展させてきている．特に「光学」は編集委員会の尽力により，レベルの高い学術誌として確立されて現在に至っている．しかし，残念ながら「光学」は日本語の学術誌であり，現在の国際化の時代においては日本から世界へ向けての学術の発信源とはなっていない．この問題は，本年後半に予定されている英語による新しい国際学術誌“OPTICAL REVIEW”の発刊により解決される．日本光学会は，このOPTICAL REVIEWを順調に発展させることが必要であり，それが学会として確立される必要条件でもあろう．

次に，もう一つの独自の会議開催活動について考えてみよう．日本光学会は主要な学術講演会を応用物理学会の春秋講演会に依存してきており，残念ながら2年前までは独自の学術講演会をもっていなかった．しかし，これも応用物理学会秋季講演会の前後に開催される光学連合シンポジウムの計画に伴ってある程度解決されてきており，今後は独自の学術講演会をもっと充実させることが求められるであろう．

以上のように，日本光学会の学会として基礎を固めるための基本的二大活動が徐々に構築されつつあり，ようやく学会としての存在意義が生れてきている．しかし，これらはあくまで基本的活動であり，日本光学会が学会として発展するためには，未だ多くの課題と活動が求められている．特に，広い光学の分野を基盤とする学会への生長と，新しい分野を開拓する学会への前進である．来る2年間は，学会としての日本光学会を問いつつ，その確立をめざして前進して行きたいものである．

* 北海道大学電子科学研究所　〒060 札幌市北区北12条西6丁目